

2022年3月6日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書4章26～34節

説教題：人手によらず神によって

ある時の市内牧師会で、分かち合いをしている時、1人の先生が言われました。「今、自分達の教会の人数は20人くらいですが、10年後には会堂一杯の人で溢れている、そういうビジョンを持って歩んで行きたいと思います」。私も、励ましを頂いたことでした。先に良いビジョンを見ながら生きて行くことは、大切なことではないかと思えます。先日も、カウンセラーをしている方と話をしている時、その方が言われました。「『5年後、どうなっていたいと思うか。そのために今日、何をするか』、そういう生き方も大切だと思いますよ。「良いビジョン(幻)」を見ること、持つことは、大事なことだと思わされます。今日の箇所は、イエス様が「良いビジョン(幻)、イメージ」を持つように励ましておられる箇所です。

イエス様の「神の国」の譬話が続きます。イエス様は、なぜ譬話によって「神の国」を語られるのか。それは「譬は、聞く人に『オヤッ』と思わせて、その心を惹き付ける」からです。しかし、それだけではありません。譬話の重要な働きは、それを聞く人にイメージを与えるということです。「ショーシャンクの空に」という映画があります。「希望の大切さ」を語る映画ですが、ある場面で主人公がこう言います。「彼女は私のことを『閉じた本のような人だ』と言っていた」。「閉じた本のような人」、私はその言葉から「心を開かない、心にあることを外に出さない(出せない)、そういう人」をイメージすることが出来ました。ビジョン(幻)、と共に「イメージ(物事についての全体的な感じ、理解、それも『良いイメージ』)」を持つことも大切なことだと思えます。(この箇所の説教で、ある牧師が「イメージ」という言葉を使っておられました。良い表現だと思いましたので、私も使わせて頂きます)。

イエス様は「『神の国(神の支配の領域)』が来ている」と語られます。しかし「神の国(神の支配の領域)」は人々の目には見えません。「ハイ、これが神の国ですよ」と言って見せることが出来るものではない。見えないものを、聞く人がイメージを持つことが出来るように、イエス様は譬で語られるのです。逆に言うと、そういう形でしか人の心は、「神の国(神の支配の領域)」に対して開けて行かない、理解が広がらないのではないのでしょうか。だから、譬が語られるのです。

しかし、「譬が聞く人の心を開く」と言っても、聞く人は、その譬話から想像を働かせて、「イメージ」を受け取らなければならないのです。「ある人が『あの人は氷のように冷たい人だ』と言うのを聞いた別の人が、体温計を持ってその人の所に行って、計って、『36度もあるじゃないか』と言った」という話を聞いたことがあります。それではイメージを受け取ったことにはなりません。私達は、イエス様の譬話から「神の国(神の支配の領域)」について、相応しいイメージを受け取らなければならない。その時に大切なことは「イエス様に対する信頼を働かせて想像する」ということです。そうした時、この2つの譬話は、「神の国(神の支配の領域)」について何を教えているのでしょうか。私達は、「『神の国(神の支配の領域)』について(あるいは『神の国』を生きることについて)どのようなイメージを持てば良いのでしょうか。内容と適用と2つに分けてお話しします。

1：内容～神の国の現実をイメージする

「26～29節」は、「新共同訳」が「『成長する種』のたとえ」と小見出しをつけている譬です。イエスは言われます。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります(25～28)。もちろん人は、肥料をやり、雑草を抜き…と手入れをします。ほったらかして何もしないわけではありません。しかしイエス様が「地は人手によらず実をならせるもの(28)」と言っておられるように、人がどんなに一生懸命に手入れをしようと、根本のところでは、人が実を結ばせることは出来ないのです。実を結ばせるのは、土の働き、神が創造された成長の仕組み、要するに神の働きによるのです。神の働きの中で種は成長

し、やがて実を結ぶのです。

イエス様は、続いて「30～32 節」で『からし種』のたとえを語られます。ユダヤでは、からし種(黒芥子)は、「小さなもの」を譬えるのに良く用いられた、いわば「小さなもの」の代表選手のような存在でした。しかし、その小さな種がいったん蒔かれると、神の働きの中で、人の背丈を越えて、家の 2 階にまで達するような植物に成長するのです。そして、その葉が作り出す地面の日陰には、実際に鳥が巣を作るらしいです。他のものを憩わせるほど大きなものになるのです。あるラビはそれに登った、という話が残っているくらい、大きく成長するのです。

この 2 つの譬から、私達は「神の国(神の支配の領域)」について、どのようなイメージを想像すれば良いのでしょうか。それは何よりもまず、地上の「神の国(神の支配の領域)」が大きく広がって行く、その成長のことが言われているのかも知れません。イエス様はあるところで「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」(ルカ 17:21)と言われました。言い換えると「神の支配の領域はあなたがたの間にあるのです」ということです。先週『神の国(神の恵の支配の領域)』は、イエス様を信じる人の心の中に、そしてまた、その人を包むようにして、存在するものだ」と申し上げました。ということは、イエス様を信じる人々が増えて行く、そのことが言われていると考えると分かり易いと思います。

地上に於ける「神の国(神の支配の領域)」について、ユダヤの人々は、「神の国」は、今の世がある時点で終わり、そこから「神の国(神が支配される来るべき世)」が始まると考えていました。しかし、実際はそうではなかったのです。「神の国(神の支配の領域)」は、「巨大なローマ帝国の中の辺境の地であるパレスチナに於けるイエス様の働き」という小さな種として始まったのです。しかし、その種が成長して行くのです。

イエス様の弟子の中には、熱心党のメンバーがいました。彼らは「自分達の力でこの世の中を何とかしなければ…」と考えていた人々です。そして「何とかする」ためには、暴力をも辞さなかった人々です。しかしイエス様はここで「夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに…地は人手によらず実をならせる…」(27)と言われます。「夜は寝て、朝は起き」、「朝は起き、夜は寝て」ではないのです。ユダヤでは、1 日が日没から始まります。「さあ、1 日が始まった。寝るぞ」となるのです。しかしそれは、言い方を換えれば「前の日(その日の日没まで)に働いた結果は、神様に任せて、自分は休む」ということでもあるのです。「神の手に委ねるしかない」ということを覚えることでもあるのです。神が「神の国(神の支配の領域)」を成長させて下さるのです。「私達の小さな思い計らいを越えて、私達の弱い力を越えて、信じる者の背後に神の働きがある」ということです。

「神の国(神の支配の領域)」は人の手によって作り出せるものではない。神は歴史の中で、時至って、独り子イエス様を十字架にお架けになりました。そして、その独り子を復活させなさいました。神のなさったことです。そのイエス様の十字架と復活、そして聖霊降臨によって、これも小さなからし種ほどの働きだった弟子たちの働きが、力を与えられ、着実に成長し、今 23 億人の人々の間に「神の国(神の支配の領域)」は来ているのです。

私は歴史を振り返って見る時、世界が色々な意味で本当の平和を得るには、皆が自らの罪を知り、イエス様の教えの前に身を低くする、それしかないように思います。だからと言って、他の信仰を否定するつもりは全くありません。しかし理想的には、皆がイエス様の教えの前に本当に身を低くして、お互い同士の関係を持つこと、そこに真の平和の可能性、祝福があるという印象を最近ますます強くしています。その意味で、私達も置かれた所で主の業に励みたいと願うのです。その時、私達は励まされます。私達の働きも、神が主権を持って導いて下さるのです。私達は種を蒔けば良いのです。蒔かない種は育ちませんから。「種を蒔くことは、あなた方に期待している」と言われているのでしょうか。そして私達は、自分達のした仕事を神様に委ねるのです。伝道も、最後まで責任を持たなければならないと思うと大変です。しかし、神を信じる人を広げて下さるのは神様です。私達は、委ねるのです。働いて、委ねて、その過程の中で、神の働きを見せて頂くのです。

2：適用～神の国を良いイメージをもって生きる

この個所を、私達の信仰生活にどのように適用すれば良いのでしょうか。

今「神の国(神の支配の領域)」を、「地上の神の国の広がり、イエス様を信じ、神の支配を受け入れる人々の広がり、成長」のこととして考えました。「種蒔き」に加わって行くことも大切な適用でしょう。しかし、ある神学者は「この譬話には、私達の霊的な成長のことも語られている」と言います。つまりそれは、私達1人びとりの心の中の「神の国(神の支配の領域)の成長」のことかも知れません。そのように考えることもできると思います。

私達も、「熱心党」ではありませんが、自分の力で何とかしなければならないと心配し、大したことが何も出来ずに無力感に襲われ、失望し、そういうことを繰り返しているのではないのでしょうか。しかしイエス様は、私達1人びとりの信仰生活についても、良いビジョン(幻)、イメージを持つように励まして下さっているのではないのでしょうか。それは「神様が主導権を取って私達を、私達の人生を、生活を導いて下さる」というイメージです。「その神様に信頼して、委ねて、信仰生活を送って行く」というイメージです。

この話は何度かしていますが…。高鍋出身の石井十次という方がおられます。「日本の社会福祉の先駆者、孤児の父」と呼ばれる人です。彼は、あることが切っ掛けで孤児と関わるようになり、孤児院を建て、最盛期にはその孤児院で1200人の孤児を養うようになるのです。石井十次について次のような伝説的な話が残っています。東北で大凶作があり、沢山の孤児達が彼の孤児院に送られて来た時のことです。心労も重なったのでしょう、彼は腸チフスに冒されて1か月の闘病をします。その病の床で、彼は幻を見ます。イエス様が大きな籠を背負っていて、その籠の中には既に200人位の子供が入っていました。ところが籠に手をかけている大人達は、まだまだ次々に子供達を籠の中に入れるのです。やがて子供達が皆入ってしまうと、イエス様は「もう済んだのか」と言って静かに立ち上がり、十次も籠に手を掛けて手伝って運んでいました。十次はその幻からイエス様のメッセージを、「『神の国(神の支配の領域)』を生きるためのイメージ」を受け取ります。「お前は、自分が孤児院を背負っていると思って心配しているけど、孤児院を背負っているのは私だ。お前は孤児院が狭くてもう子供達を入れることは出来ないと思っているが、今見た通り、いくらでも入る。お前は心配せずに、ありたけの力を出して手伝いさえすれば良いのだ。」「手伝いさえすれば良いのだ」、この言葉が十次の心に刻まれたと言います。彼の中に、イエス様が主人公、自分は手伝う者、というイメージが出来るのです。それが彼を支えて行くのです。

私達も、自分の人生について、あるいは日頃の生活について、心の中に、また具体的な場面において、神様に任せる部分、「神が背負って下さっているのだ、私は神様を手伝っているのだ」という部分、それを持つことは、意味深いことだと思います。その時、人生に希望が見えてきます。その時、行き詰まりのように見える所に、道が開けて来るのです。「5000人の給食」の記事において、弟子達は言うのです。「ここは寂しい所ですし、時刻ももう回っています。ですから群衆を解散させてください。そして村に行つてめいめいで食物を買うようにさせてください」(マタイ 14:13)。「私達にはどうしようもありません」と言うのです。確かにそうだったでしょう。しかしそれが「行き詰まり」です。なぜ「イエス様、どうすれば良いのでしょうか。あなたは どうして下さいますか」と言えなかったのでしょうか。「神の働き」を計算に入れない時に、私達は行き詰まる、希望が見えないのです。しかし、結局5000人に食事を与えたのは、イエス様だったのです。神様の働きを思う時にこそ、希望がやって来るのです。

石井十次の例を取るまでもなく、「神に委ねる」ということは、「何もしない」ということではありません。十次も孤児院の様子を、当時珍しかった映像に納めて、映写会をして全国を回ったりしています。自分に出来ること、自分がしなければならないことは、して行くのです。しかしそれ以上に、「祈り」をもって神様の助けを期待するのです。生きて働いて下さる神様を信じるのです。そして、その結果を、また神に任せて行くのです。もちろん「こんなに祈っているのに、いつになったら状況は変

わるのか」と思う時も多いと思います。その意味で「神に委ねる」時には、忍耐が必要です。また、現実の様々な出来事に直面した時、「神が働いて下さる」というイメージに生きることは、口で言うほど易しいことではないでしょう。私も困難に弱い人間です。問題を前にして、小さな信仰が吹き飛んでしまうこともしばしばです。しかし、それでもイエス様は、この個所を通して「良いイメージを持って生きること」の大切さを教えて下さっているのではないのでしょうか。

なぜ、アブラハムが「信仰の父」と呼ばれるのか。アブラハムは、カナンに来た時、「わたしはこの土地をあなたに与える」と言われました。しかし、カナンには先住のカナン人が住んでいたのです。「神の言葉」と「現実」が違うのです。「神様。なぜですか」と言いたいところでしょう。しかし、アブラハムは、「神の示されたイメージ」に生きるのです。そのイメージを目の前に置きながら、彼はカナン人と折衝をしながら、生きて行くのです。その中で、土地が彼のものになって行くのです。信仰の戦いのようなところで、神様はアブラハムを祝福されたのです。神が教えて下さるイメージを心に刻み、そのイメージに生きる、それが信仰者の行き方であることを聖書は語ります。

「百万人の福音」に、文芸作品を執筆していたけれど、「置かれた状況からみて、どうしてもその仕事が出来そうにない」と言って、編集者に断りを入れた方の証しがありました。そうしたら、編集者が彼女の家を訪ねて来て、話をじっくり聞いて、一言言われたのです。「お委ねしたらいいのです」。彼女は、この言葉を信仰で受け止めるのです。「委ねる」ということを本気で受け止めた時、彼女は変わるのです。希望が与えられるのです。そして「出来ない」と思っていたことが出来たのです。

私達は「神の国(神の恵の支配の領域)」を生かされています。「神の国(神の支配の領域)」のイメージ—(神が私を支えて下さっている、神が私の中で、私の外で働いて下さっている、神が私に手を添えて導いて下さっている、そのような)—「神の国(神の支配の領域)」についての良いイメージを持ちながら、その良いイメージ、良いビジョン(幻)に生きて行きたいと願います。神が先導して下さいます。私達に出来ないこと、大きすぎることを、それは神様にお任せして、自分の出来るところで「神の国(神の支配の領域)」のイメージに生きて行きましょう。きっと「神の国(神の恵みの支配の領域)」の現実を、神が経験させて下さいます。

終わりに

今日 2 つのことを申しあげました。繰り返しますが、神様が、この世界において、そして私達の心の中において、「神の国(神の恵の支配の領域)」を拓けて下さいます。その神に、信頼し、委ねて歩いて参りましょう。